

座談会

『光輪鈔』を拝読して

出席者

広瀬 杲

細川 行信

大屋 憲一

寺川 俊昭

鍵主 良敬

本誌二九号に掲載した金子大榮先生の絶筆『光輪鈔』は、その後静かな反響を呼び起した。そして、一部読者の方々の間に、この書をどう読んだらよいのか——という声が一再ならず聞かれた。編集部では、生前の師に因縁が深かった本学の先生にお集りいただき、『光輪鈔』を軸に、先師の教学と信仰について、いくつかの角度から光をあてていただいた。なお座談会のホスト役を広瀬先生にお願いした。(編集部)

一如の内景

広瀬 『光輪鈔』という、こういう題名の原稿を『親鸞教学』の為に金子先生がお書きになりました。初めにその経緯と申しますか、因縁のようなことを少しお話しておきたいと思います。

実は『光輪鈔』は『親鸞教学』の原稿としては文字通り絶筆だと、こう言うて間違いがないと思います。その後には確か、他の雑誌、あるいは他のものに二、三お書きになったものはございますけれども、まとまってですね、先生が自分で筆を執ってきっちりお書きになった、謂わば学術的な確認をした原稿の最後の原稿であると、

これはもうはっきり言うていいと思うんですね。しかも亡くなられたのが昨年の十月二十日、午前四時三十分でありますけれども。この原稿をお書き出しになっておったのが、私が伺っておりますところでは、六月から七月へかけてじゃなかったかと私は思っています、ちょうどその頃、先生の中に「光輪」という一つの事柄を中心とした思索、思想というふうなものが出てきまして、色んな形で「光輪」ということを主題にしながら話しをしておられた。けれども、それが結局は『光輪鈔』という形ではっきり結実するような形をとったわけでありまして。まあ、そういうことで、先生の教学的な発表としては文字通り最後であります。と同時に、先生の諸思想をここへ、こう凝集していくということでも、またこれはやはり最後の、最後のものだと、こう言い切れると思います。殊にですね、この原稿を病床におられて机に向いながらお書きになったものですので、原稿それ自身が随分読みにくい原稿だったんです。

私事になりますけれども、私が、亡くられるちょうど一週間ばかり前に、先生に呼ばれて、お邪魔をしましたわけです。その時に何故私を呼んだのかは御家族の方も私も、勿論全然分からなかったのです。けれども、

行きましたら先生がおっしゃったことは『光輪鈔』をよく読んでおいて下さい。これがまあ、先生の、私が聞きました最後のことばなんですね。『光輪鈔』を、読みにくいでしょうが、よく読んでおいて下さい」と、こう言われたんです。

私の念頭では、まあ『光輪鈔』の原稿を『親鸞教学』の方へ出してあるから、校正を、やりにくいだろうけれども、お前ちつとは慣れているから、よくやれ、という程度に聞いていましたんです。ところがその後ですね、御家族の方にお聞きしてみましたら、実は『光輪鈔』の中には、自分がこれまでずっと考え続けてきたことが全部この中に撰め込まれているから『光輪鈔』をよく読みなさいということをお家族方にも折々言われたということですね。ということになりますと、私のような浅薄な領解では至らないのでありまして、実は先生自身が最後に『光輪鈔』へ先生の一生の教学的な営みというものを結実して、そしてこの短かい、ほんとに僅かなものでありますけれども、短かいものを自分の最後の力でですね、振り絞るようにして原稿をお書きになってそれを遺していくと、しかもその原稿について先生自身が「この中に自分の思索してきた事柄の大切な問題というのは全

部入っているからこれを読め」というふうに指示までしていかれたということがございます。

そういう意味では、短かいものではありますけれども、先生の、ある意味では遺教として、文字通り聞きとっていき、その中から、ただ先生を偲ぶというだけじゃなくして、一体、先生が何を、こう明らかにしようとなさったのか、そのことが我々にとっては何を語りかけ、やがて我々はそれをどう受けとめ、何を聞きとっていったらいいんだろうかな、というようなことが僕自身の念頭にもございますし、そんなことがある意味では『光輪鈔』という題名の原稿をいただいた因縁になる、というんじゃないかなと思います。

ところで、そういう『光輪鈔』でありますけれども、随分短かいところへ、こう透明というんですか、凝集してありますので、なかなか難しいんですね。ただ、『光輪鈔』の中に、上・中・下と、短かいですけれども上・中・下と完全に三つに分かれているわけですね。その「上」と、こういうところで「一如の実相」、こういうタイトルがありますし、「中」のところでは「対応の行信」というタイトルがございます。最後の「下」のところでは「光輪の道理」、こういうふうに三つに分かれておりますので、

できればこの三つの、上・中・下の三つのタイトルを柱にしてお話し合いをしていただければと思います。

*

*

*

広瀬 まあ「一如の実相」ということでありますけれども、お読みいただいてお分かりだと思いますけれども、特に先生が主張しておられることがですね、親鸞の思想、親鸞が明らかにした大きなお仕事というのは、一言で言うと、実体観からの脱却であって、そういうこと言うならば「一如の実相」を明らかにするんだと、こういうことをおっしゃっているわけですが、先生が特に最後にですね、際立ってそれをはっきりおっしゃったということなんです。そういうことが、仏教は本来そういうものだ、普通私達は考えているんですけれども、特に鍵主先生は華嚴の御専門ですし、金子先生も華嚴をおやりになったということもございますので、鍵主先生いかなもんでしょう、そのあたりから口火を切っていただけかもしれませんか。

鍵主 そうですね、「一如」という言葉で金子先生の、絶筆が始まっているということを思います『華嚴経』の中の「十方の無導人一道より生死を出づ」と言われる

場合の「一道」という言葉を思い出します。で、その「一如」というものは「一道」というものとは多少ニュアンスは違うでしょうが、帰結するところはやはり、そういうものを踏まえた歩みを意味しているのではないかと思うのです。そこにひたすらに生涯を、尽くされた金子先生の歩みがあったのではないのでしょうか。

『光輪鈔』は金子先生の最後の論文になるのでしょうが、最初は『仏教概論』ですね、あれが最初にですか。

広瀬 まだ先に『真宗の教義と其の歴史』というのがあります。それが一番最初なんですね。

鍵主 それの方が先になりますか。『仏教概論』というようなものが、私は、金子先生の教学の根底にあったのではないかと考えています。『華嚴経』を踏まえた上での仏教概論ですね。つまり『華嚴経』というものが仏教概論として展開するというような、そういう意味の歩みを先生はなさったのではないかと思うのです。そしてその場合、「一道」というあの言葉でも、多分——『華嚴経』はあれだけの大きなお経なんですけれども——二つか三つくらいしかない言葉なんですね、非常に少ないです。その言葉を見つけ出したのは曇鸞大師でしょうし、

それを宗祖がまた再評価というか、そういう形で『教行信証』の中に引用される。そういう意味で、歩むことによってそれこそ生死というものを尽くされた。そして、行き着く先というか、御自分の本当に帰っていかれるような世界を「一如」として我々にお示しになった。

まあ『光輪鈔』は非常に濃い内容なので、こういう座談会が開かれるというようなこともそうだからでしょうけれども……問題を投げかけられたような感じを私は受けまして、そういうふうな点で大変なことになったなというふうなことです。(笑い)

そういうようなことしかまだ今のところないのでして、先生方の御意見をお聞きして少し……。

広瀬 鍵主先生がおっしゃったことは、実は私は気が付きませんでしたんですよ。「一如の実相」ということで書き出してこられたと、そこで先程申し上げましたように、実体観というものが払われていくということが親鸞の大きな仕事であるということでは一貫している、ということでは分かるんですが、それが「一如」ということを「道」と、『華嚴経』の中にある「一道より生死を出づ」と、「一道とは無導道」だということの「無導道」ですね。「道」という言葉で、こう鍵主先生が押えられ

たんですが、気が付かなかったということは迂闊なこと
で、実はこの上・中・下のなかのですね、「中」のこ
ろへきますとそれが「道」という問題になって出てきて
いるんですね。

そうするとやはり金子先生は、そういうことを憶念し
ながら歩かれてくる中で、やはり「一如の実相」という
のを指し示めされたんだと。成程そうだなあと、今伺い
ながら思いましたんですが……。

ところで、そういう「一如」ということは歩みだと、
道だということになってきます時に、ひとつこう先生の
言葉ですね、最初の方にもありますように、「一如の
実相であって、万有の本体というようなものではない」
と、こういうふうに書かれておられるんですが、この辺
のこと、大屋先生、お読みになっていかがでしょうか。

大屋 この……盛んに度々ですね、今言われましたよ
うに、実体観よりの脱却ということが出ておるわけなん
ですけれども、やはり実体的な捉え方と言いますか、そ
ういうものが私達の知識とか頭の中では分かっておっ
ても、実際の生活としては実体的に捉えていくというよ
うなことがなかなか尽きないみたいところがあるわけ
で、そういうところが私、これを読ましていただきまして、

感じたわけなんです。ですからそういうところに、やは
り先生が絶えず留意せられておられたのでないかなと思
っておるところです。

広瀬 確かにおっしゃられる通りですね。特に宗教が、
仏教ですけれども、広い意味といえますか、あるいはも
う少し確認して言いますならば、言葉を集約してですね、
宗教という言葉に納めてみて、宗教の問題、従って信仰
の問題という場合に、いま言う実体観ということはどう
なっていくというんですかね。むしろ、その信仰とか宗
教とかいう事柄の中では、理としては、道理としては実
体観というものは排されていくというような問題とい
うのはありませんでしょうか。

大屋 それは、金子先生ではありませんけれども、鈴
木先生が、あれは『大乘仏教概論』(Outlines of Maha-
yana Buddhism)だったでしょうか、その中の一番初め
に仏教の本質として“*No God*”それから“*No soul*”
ですね、無神と無靈魂ということが仏教の特質だ、とい
うことを言われているんですがね。そこにやはり実体観
というものを、靈魂にしても靈魂の実体というものを認
めてくると人を誤らすのみでなく、有害でさえあるのだ
と。ですから寧ろ鈴木先生のような場合は靈性的という

ふうに言われてますね。

それで、そういうふうな実体観ということは本来、だからこれは「NO God」の場合にしろですね、そういうものじゃないんだと、やはり仏教の立場というのは基本は縁起思想であって、そこから出ているのであるからということを一番冒頭から切り出してあるところがあるんです。それを考えていきます時に、例えば今の靈魂の問題にしても、それは分かっているながら、実際の生活としては非常にその問題というのは、生活の中に深くくいっっているわけですね。それで、そういうことを『光輪鈔』を読ましてもらった時に、実体と出てきましたから、やはりこれは大変な問題だと、単にこれを知的にどうこうというような問題より、もっと深い形できている。

広瀬 恐らくこの「一如の実相」ということを、第一章と申しますか、『光輪鈔』の「上」として先生がおかれたというところには、先程鍵主先生がおっしゃったような、「如」ということが「道」、「道」ということは一つの歩み、生涯を尽して歩んでいくということの中の、自他共に明確にしていこうという確認ということが、裏打ちとしてあったように思いますですね。

例えば、言葉としましても、「青の実体に執えられて

青さの実相を知らない」というふうな、ちょっとロマンチックな表現をとっておられますけれども、こういう発想というのは確かにこれは『華嚴経』の世界というものを感じますね。そして、それを只今、大屋先生の言われたように、分かっているながら、分かっているということと、それに領いて生きていくということがどれ程隔絶したものになるかという問題があります。これも金子先生の言葉では、「凡知ではないようにも思われる」というふうな、非常に含みのある言葉で押えておられるんですが……。

特にそのことです。例ということではありませんが、具体的事実として真宗の場合に、浄土教というても広ければ浄土教でしょうが、突き詰めて言えば浄土真宗の場合、そして具体的には真宗の歴史の上に歩いてきた、真宗が歴史の上に記されてきた姿の上でもですね、即問題になるのが地獄と極楽という言葉なんです。それをすばっと取り上げているわけですね。そういう時に、地獄と極楽、まあ極楽という言葉はここではとらなくても、浄土の十の樂というふうなものを出してきながら、親鸞の地獄という言葉の中に、あるいは浄土という言葉の中には実体の考え方というものは払われているんだという

ことを再確認するように明確にしていこうとしているんですけれども……。寺川先生、そういうことが現実のですね、真宗の歩みの中でですね、先生がこまできてこれを先生自身がはつきりさせたというだけじゃなくて、遺教としていかれたということになると、そういう問題はどうか。

寺川 今、お尋ねと言いますか、話題にされました地獄と浄土ですが、それを考えますに先だって、若干すらしてもよろしいでしょうか。

広瀬 どうぞ。 (笑い)

寺川 鍵主先生が『華嚴經』のことに触れて下さったんですが、あの「因分可説、果分不可説」というのは華嚴の言葉ですね。『十地經』ですか。

鍵主 はい、『十地經論』の方です。

寺川 『十地經論』ですか。それをフッと、一つは思っていたんです。もう一つはね、根本本体という、さっき大屋先生がお話しなりましたこと。事柄ではなくて、言葉ですね、これを読んでおりましたですね、思いますのは、金子先生の満九十五歳の思索ですね、先程お聞きするところでは、夏頃の執筆だそうですね。金子先生の長い生涯がようやく終りを告げようとする、完結し

ていく直前の思索、あるいは精神界ですね、これをお述べになっておる。それは凡夫の身だから因分でありませけれども、学び終ったと。広瀬先生がおっしゃる通り、完全に燃焼しきられようとする直前ですから、学び終った、あるいは生き終った。ということ言えば、先生の学道においては果分の心境をお述べになったと、こう読んでいいんだろうと思います。

* * *

寺川 そこで思うのは晩年の宗祖の御心境ですね。私が『光輪鈔』を読みまして一番感じたのは、晩年の宗祖の自然法爾の思想なんです。まあその自然法爾、ここにお書きになっております無為涅槃という言葉、先生何度も語っておられますけれども、私は無上涅槃と言いたい……。ま、無為というのは完全燃焼し終るという意味で、無為涅槃ということを選ばれたんだろうと思うんですが、それと、その果分不可説。宗祖の場合は自然法爾で、それは不思議という言葉でしか表せない世界でもあると……。そうすると「ただあればと弥陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまゐらすべし」という『歎異抄』の言葉をふっと思ひ出すんですね。ああいう

讃嘆の「ただほればれ」と仰ぐとしか言いようのない、言葉を超えた、大きな世界を讃嘆なさったんだなあということがある一つです。

もう一つは本体なのですが、本体は、まあ清沢先生の「我は是の如く如来を信ずる」の、これも絶筆の最後がですね、「私の信ずる如来は、この天と命との根本本体である」と、こう結ばれているんです。同じ絶筆、同じ仏道の求道者の二人の絶筆を二つ思いおこしてみますとね、清沢先生の場合因分の……、満四十で、謂わば人生の、やっぱり清沢先生も業を尽して死なれたというものの、九十五歳の生涯と比べれば、早く生命を終わってしまったと。『道』の道程に於いて倒れたと、こういう感じの人が清沢先生であり、その絶筆はやっぱり、述べておられるのは二種深信と申しますけれども、しかし何と言いましようかね、緊張したと言いますか、厳肅な、こう迫ってくるものがひとつある。それに比べると金子先生の方は、やっぱり、こう果分のようなですね、豊かと言いますか、ほんとただほればれと……こういう境界をお述べになり、しかもそこに繰り返す必要はないかも知れませんが、あの極楽無為涅槃界という言葉を引きかれてですね、無為涅槃界、そしてそれを表す「一

如」。ここに先生が非常に大きなものを感じておいでになると。これは晩年の宗祖の心境の核心ですね。つまり「誓願不可思議一実真如海なり。『大無量寿経』の宗教、他力真宗の正意也。」でしたか、ああいう言葉を求められた晩年の宗祖の心境、そこへ先生も還っていかれたんだなあと、こういう感じを強くもつんです。

それでね、地獄・極楽ですけども、そういうものを、実体としての地獄というようにでなくてね、形容詞としての地獄と。ちょっと理解しにくい概念ですけども、やっぱり一如を知る無上仏道の智慧ですね、浄土教の学徒であられたんですから浄土を先ず挙げられるべきとも思いますけれども、やはり晩年の宗祖と同じようにね、一如あるいは無上涅槃をいただいているんだと、あるいは還っていくんだと、そこらにやっぱり浄土真宗の学徒であられた以上に、仏道・仏教の学徒であられた。そういう金子先生の面目を感じるんですが……。

広瀬 成程。今のお話して清沢先生の最後、絶筆のお言葉の結びと、金子先生の最後の『光輪鈔』との、因分果分というところでお話していただいたんですが、確かに、そういう……感情としては、ほんとにそういうものを受けますですね。と同時に、何かやっぱり清沢先生

が倒れるというんですか、まあそれこそ娑婆の縁尽きて、一生を終っていかれたその全体が遺教として遺していったものを、受け継いできて、やはりそれを御自分の生涯で、歩いていく中で明らかにしていかなくちやならないと、気負った使命感じゃなくて、自分の生命が引き受けた使命感とでも言いましょうかね、そんなものが恐らく、寺川先生がおっしゃるように、最後にこういう形に必然的に金子先生の上に結実をしてみたんだと。こういうふうなことを感じさせられますですね。

特に、あの読みにくい原稿で英語をですね……(笑い)ちょこちょこ書いて、特に likely なって言葉ですね、先生自身も「如」というようなことを、以前には名詞的用法から動詞的用法へ、というようなことを言われたんですけれども、ここでは名詞と動詞とで組み合わせられて表現されるものではないんだと、敢えて言えば、副詞と形容詞ということに適応して領解されてくるもんだと。副詞ではなく形容詞であるというんでなく、副詞あるいは形容詞的な感覚の中で領かれるもんであって、もしそれが動詞と名詞とになってしまふならば、どうしても実体性というものは払えないんだと、そういうことで likely というような言葉が出てきたんだらうと思います。

けれども、その時ですね、偶々寺川先生の方から親鸞聖人の晩年のお言葉と申しますか、自然法爾ということが出てまいりましたけれども……。親鸞聖人の場合もやはり、自然法爾ということと同時に、如来と等しい、弥勒と同じというような思想が出てきて——これは細川先生に是非お聞きしたいんですが、偶々そういう話が出ましたもんですからね。その辺で、そういうことがですね、親鸞聖人の九十年の晩年に近づけば近づく程、もう説明無用という形でお手紙なんかに出てまいりますんですね。で、やはり繰り返し繰り返し、その自然法爾の思想によって「如来と等し」ということをお話しになる。

そこで、そういうことと今の偶々、地獄・極楽というようなことも、平凡なひっかかりとなって出てくると思うんですが、どんなもんなんでしょうか。

晩年、ああいうふうに言われた親鸞聖人のお言葉が親鸞聖人のお弟子達によってね、どう受けとめられたのか、やっぱり私達の場合にもよく似たものがあると思うんですね、時代は違いますがそれでも。

細川 「如来等同」、「諸仏等同」という、大変むづかしいところが最後にこちらへ回わってききましたが、私なりに、先生の晩年に接しまして感じたままを申し上げます

みたいと思います。私は、先生の一生は「聞思」ということでつぎえているように思うのです。だから「聞思」というひとつの立場において、私は先生とうんと年齢が離れているにかかわらず、私が問題をもってまいりまして先生のほうがその問題を深めて、また、私の少し関係しているような部門でありますと、そこを先生は、私の伺うのを待って尋ねられる。そこに徹底した「聞思」の姿勢だなあとこのことを思います。これは聞法求道ということになろうかと思いますが、そういう徹底した立場から申しますとやはり宗祖のおっしゃった「弟子一人ももたず」という、そういうことが思われます。どういうことをしようが、どういう年の開きがあろうが、その人からいろんなことを聞いていく。そういうことは、やはり私は「親友」と申しますか、そういうものが「如来等同」といったようなことにもですね、具体的に生活の上で味わわれてくるんじゃないか、とこういうことを感じております。

そういう中で、私が先生におたずねして、そして先生から私の浅い問いを深くしていただいて、私自身学ばしめてもらったことをひとつ申し上げますと、この第一番目のところは「一如の実相」ということですが、そこにま

あ地獄、極楽ということですから、『往生要集』のことが出ております。それに『往生要集』というのは七祖聖教の中でも一番大きい、大部なものです。読ませていただくだけでも大変なものです。そして実際どういう点で七高僧として選ばれ、『往生要集』が聖教に入るのかということは実はよく分らない。読むだけでも非常に大変でありましたので、「先生、『往生要集』というのはいったい大きいだけでどういうんでしょうか」と、こうお尋ねしたことがあるんです。それは私の考えでは、「広いだけで浅い」というような予定観念があったんです。というのは「下」のところに、これは上・中・下と分れておりますけれども、先生はつまるところ、これはやはり「光輪」ということを最後に明確にしていこうというところで、いずれも関連性があって、そしてそれを通しての先生のいろいろ深められていく「聞思」の姿勢だと、私はまあそういうことで思っておるんですが。

*

*

*

細川　ところで、その広さはその深さを表現しているということですね。これは先生の言葉で、その時を今思い出して申しますと、「それはね、あなた広いん

ですよ」とおっしゃるんですね。私の予定概念では、広いから浅いという、こうですね。先生は「広いんですよ。だから深いんですよ」とこうおっしゃられたんです。その時、はあと思ってね。私のものでつかまえる、ですから実体的に、あるいは概念的につかまえようとする。そういういき方に対してね、先生は改めて「そうじゃないんですよ」ということを教えていただいたんだなあと思ったことです。そういう、どうしても実体でとらえようとするいき方、現代はどうしてもそういう傾向だと思うんですが、だからそれをやっぱし離れていかななくてはならないというところに、大事な仏教の立場があるんじゃないかと思いました。

これはよく先生がおっしゃった「如」というところに仏教の大事な一つの立場があるんだということですね。だから「如来」だと、「如」とこう言わなくてはならないということをおっしゃったことを覚えております。そういう「如」というと、何かこう我々が理的につかまえようとすればつかまえられない、そういうつかまえられないところに、あるいはそれをこう超えたと申しますと何かただ超えたということで、それも抽象的になるんですけれども、結局その分別を超えたそこに無分別とい

うものがあり、そういうことを頭わすためにはどうしても「一如」というような「如」でないといけない。「如来等同」ということと、少し離れたかも分りませんけれども……。

寺川 あのを、お聞きしておりましたちょっと思ったことでもいいですか。「諸仏等同」ということがなぜ言えるのかということは、「廻向成就の信」つまり「証大涅槃の真因」という意味をもつ「廻向成就の信」というところに一つの根拠があるということは思いますけども、その「諸仏等同」という、その「諸仏」の境界、まあ「仏」の境界ですね、これは「一如」あるいは「真如一実の功德宝海」という言葉で言われておるのでしょうが、これは宗祖の場合は補処の弥勒を始めとしてですね、凡夫のはからうべきものでない、ただ不思議という外はないんだと、こういうことを繰り返しておっしゃっておる。まあ『歎異抄』的なうけとめをすれば、さっき申したように「ただほればれ」とするという言葉で表わされるようなものだと思うんです。それをですね、「It is so」とおっしゃる。大拙先生だったら「suchness」でしたか、こう言われることを聞いてですね、だから我々はある理解めいたものは感じられなくてもね、それこそ「如実の

知見」としてもちににくい。ただここで金子先生がおっしゃっている言葉を使えばね、無上涅槃の世界に直接するのでなくて、「向涅槃道」という言葉が使われておりますね。さっき鍵主先生がおっしゃった「十方の無導人、一道より生死を出づ。一道とは一無導道なり」と。そこに非常に大きい意味があるんでないでしょうか。「向涅槃道」に立てばね、涅槃の世界に帰入したと等しいんだという信念を汝自身がもつことができる。そこらへんが第二、第三のですね、テーマを書いていく出発点ではないでしょうか。

広瀬 そうですね、やはり最初に鍵主先生が「如」ということを「道」というところでお話してお話し下さいましたように。それに大屋先生の場合やっぱり金子先生にも親しく、時折りお話しをしておられた。金子先生は晩年このようなことを言うておられたんですが、「もうちょっと鈴木先生の話しを聞いとくと良かったなあ」と言うておられましたのすけどね。それを今、フツと思ひ浮べたんです。

というのは、鈴木先生が「靈性」ということで、特にあの戦後の混乱期に、「靈性的自覚」「日本的靈性」とかいふ言葉で、日本人それ自体がもっている価値観が崩れて

いく中で、どこに立ったらいいかということを具体的に指し示していくことをやられましたですね。私は今、フツとこうそんなことも一瞬間頭に浮べていたわけなんです。ちょうど、親鸞聖人が晩年に先程お話しのあるような「如来等同」というようなことをおっしゃる時、非常に言葉が明確になっておるのです。例えば、「その心浄土に居す」というような、ああいう言い方ですね。これは『華嚴經』にあるんだと。それに対する問いに対して、はっきり「信心の人はその心浄土に既に至り」ということなんだというような、そういう表現で言いきっていくますですね。いわゆる「如」という“likely”というような感覚で教えられることを、もう一べん確認用語というような形でおさえていきますですね。だからやっぱり「弥勒と同じ」「如来と等し」という言い方も、これはかなり明確な表現だと思うんです。そういう意味では、やはり歩みというものが限り、その言葉それ自体が既に実体化への前哨になる。

しかし、それは歩みの中では限りなく実体化を破って明確になっていく、明晰になっていく事柄だということです。もしそういうことがないならば、仏教というのは「如」という言葉の中で、時には感性的な情緒の中に

溺れるかも分りませんし、時には独断的な観念の中で遊ぶということになるかも知れない。何かそれが具体的に指し示されている。私はそれがこの最初の一段のところで、特に地獄とか極楽とかいう問題を出してこられて、それをはっきり実体の思想から「一如の実相」の領きとすることでおさえて、「地獄は一定すみか」ということと「往生は一定」ということとで明確にしていかれた。ということは、私はやはり遺教として聞く時には今後も実体性を払いながら明確にし、明晰にされていかなくてはいけないという視座と申しますかね、明確さがここにあるように思うんです。

鍵主 いま私、ちょっと広瀬先生のお言葉で思い出したんですが、この地獄というようなものが金子先生では形容詞なんだということですね、「そういうような」という……。金子先生の御一生には、まあ異安心の問題とかその他様々な、それこそ人間の血みどろなとか、あるいはうみがくさって何かドロドロしているとか、そういうようなものを生々しく感じになり、そしてそんな思いの中でお子さんを亡くされたり、奥さんを亡くされたのではないか。本当に身を切られるようなそういうものを歩んでこられた。そしてそれを「ばあ

と、"そうだったんだなあ"というふうな、"私の一生はそうだったんだ"というふうなことを最後に何か「一定すみかぞかし」と金子先生はおっしゃっておられます。

けれどもそこで、その中に溺れ込んでしまわずに、つまり「向涅槃道」というようなそこからの歩みですね。絶望の中で何かこう全く行き先を見失うというのではない、だからこれなんだというふうな、そういう道をなおかつ歩まれた。そういう力をですね、かたじけなくも「如来より賜った」という「弥勒と等しい」という、何かとても自分自身から生まれてくるものではないけれども、なまなましくいただいたと言ったらいいでしょ

か。そういうものに力づけられたからこそ、"金子は一番最初に死ぬだろう"と、浩浩洞の多くの中で言われていたにもかかわらず、その先生が最後まで御自分の業をつくされたとか、たくましく歩まれた。そんなことを今先生の言葉から思いましたんですが、ちょっとおかしいでしょうか。

細川 今ね、先生おっしゃったように、少し金子先生の生涯の上で申しますとね、広島時代の十年ですが、こ

それは追放ということもあって、それからお子さんと奥さんをその広島時代、お二人亡くされたんですね。その折りに正親先生に出された手紙が、西宝寺さんにかなり沢山あるんです。去年それを私拝見させていただきました。先生の場合、広島へ行かれる前、興法学園時代、それから今度は広島時代十年間、帰られてからとありますが、その中で広島時代のこと私よく分らなかったもんですからね、その一通一通を読ませていただきましたら、何と申しますかそういう手紙においてね、先生の非常に苦しい、悲しい、そういう悲しみがあるにも関わらず、そこでは「転成」という言葉が出ております。いわゆる仏法のことね、みんなこう転成して味わっておられるんです。世間のと申しますか、御自分の悲しみということ、これは深い非常な悲しみですが、それが深ければ深いほど今度は喜びであるという手紙ばっかしなんです。私、これを始めて拝見して驚いたようなことなんです。だからそういうことがやはり「一如」と言われるような、これは「実体」ではなくて「実相」と、こう金子先生がおっしゃるところに本当に「地獄は一定」というものが、「往生は一定」という、こういう展開というものが自然に行なわれるというようなことです。しみじみそういう

ことを感じたんです。私なんかならね、これどうやろうと、何するか分らんし、もう自暴自棄になるだろうと、そういうことをちょっと御紹介もあって申し上げておきたいと思います。

大屋 ずっとお話し聞いていますうちに、今広島時代のことがありましたけども、その広島時代に金子先生自身が『肉身の死で悟る』という題で書いておられるのがあるんです。それを読んでみますと、お子さんを亡くされて、それから奥さんも亡くなられたですね。それでこういうふうに書いてあります。「ただし悲しみは身辺からおこった。前の家内と五人の子供のうち二人が重病にかかり、つぎつぎに死去した。長い間病んだ結果だが、それでも自分の誠意が足らなかったのではないかとの思いが残る。しかもこの感じが同時に自分を救ってくれている」、こう書かれています。「こう悟った時、始めて長年の疑問であった真宗の教えが分ってきたのである」と自分でこういうふうに書かれていますね。私はここで、少し読ませてもらった時に、ハッこれだ！というふうに先生の生涯をですね、思ったんです。

広瀬 いや、ほんとに、具体的にだんだんこう内実が確認できました。「一如の実相」という題を出して、

こう書かれていてもこれわずかなものですから、やっぱり読んでいただけでは分らないんですが、今、先生方のお話しをお聞きしますとですね、そのことが「道」なんだと。「道」というのも説明なんだというようなことを、こちらにお話しをお聞きしながらひしひしと感ぜさせていただきました。先程鍵主先生が最後におっしゃったことを言うと、「そういう力を賜わる」とこういうことをおっしゃいましたけれども、正にその力を賜わる。細川先生や大屋先生が今読んで下さったような、それこそ悲しみの事実を業縁の中で生きなくてはならない。しかしそのことの中に、こう力を賜わって新しく再生していく、それが「一如の実相」ということの世界の中の出来事だと。おそらくそれが次の「対応の行信」というところへ来るんだと思うんです。

応の伝統

広瀬 その「対応の行信」のところでは、特に明らかに「如実修行相応は信心ひとつにさだめた」とこう親鸞がはっきり言いきった、あの曇鸞の信心の具体的内面、それを如来と衆生との関係の中で確認していくという伝統を、特に近代の清沢満之、曾我量深という二人の先生、

先輩の教えをうけながら、私は最後にそれをこういうふうにいただくことができたというひとつの表白になっているわけですね。おそらくそういうことが、ここへくるんだらうなということを自ずから知らしていただいたんです。その「如実修行相応は信心ひとつ」といういた、その信心の内景とでも言いましょうか、そういうものとして「対応」と清沢先生がおっしゃること、これは言葉で申しますと「対応」でありますが、有限と無限との関係という形でおっしゃるのですけれども寺川先生、そのへんのところを……。

寺川 おっしゃったとおりですね。対応というのは「有限と無限との対応」、これが清沢先生の根本範疇といいますが、概念であろいかと思います。それを曇鸞によって「相応」にもどしですね、更に曾我先生によって感応、「感応道交」の「感応」、さらにまあ宗祖の御心を思いながらでしょうけども「呼応」と、こういう対応、相応、感応、呼応と、これはまあ「応」の……。

広瀬 要するに「応」の伝統のようですね。

寺川 はい、「応」の伝統……。なるほど。そういうことを今、信心の内景とおっしゃいましたけども、信心の内景であると同時にまた信心を生むような関係として

先生はつかまれ、自覚なさったと。それについて思うのは、最後にとんでしまえますけども、最後にですね、

「光輪」についてお述べになりましたね、六頁の二行目でですね。「光輪はそうではなく、かえて雲の如く、遙かに照らしてほのかに感じられる」とこうありますでしょう。それを見てあの「光雲無尋如虚空」という『讚阿弥陀仏偈和讃』の意味の深い言葉を思い出すんです。

「光雲無尋如虚空」「無尋如虚空」は完全に最初の「無上涅槃」「無為涅槃界」を示す言葉ですし、それから「光の雲の如く」はその「likely」ですね。雲の如く如来とこう対応し、名号と呼応するという、そこにただかれてくる。丁度、曾我先生が浄土が来るんですけど、こう言っておられたですね。こっちが行くんじゃなくて、念仏すれば浄土が来るんだと。あれと同じ御心境がおりに合ったんだらうと思うんです。

ところでそれを思いながら、今の細川先生のおっしゃった金子先生の実人生ですね、人間としてのいろんな悲しみということをお聞きしておりましたってフツと思ったのが『観無量寿経講話』なんです。実は私は金子先生の本を最初に読んだのは『真宗のはなし』だったんです。昭和二十七年だったんですけどよく覚えてます。一応の真

宗の教えというものはこういうものかという、いわゆる理解といいますかね、存知はいただいたけどもですね、それ以上にどうもよくわからなかったことなんです。その後何冊か読んでいるうちに今の『観無量寿経講話』を読みまして、非常に感銘深いものをいただいた記憶があります。あそこで『観経』の「序分」の講話のところですけれども、言葉は今ちょっと思い出させませんけれども、この世に光がない。しかしこの世に光がないから未知の世界の扉をたたくんだ。たたけども答えがあるかないかはわからない。ただたたくほかはない。しかし、そのたたくものは同時にこの世に光がないということは知っている。つまり覚めているんだ、と言うようなことをお書きになつていたはずなんです。それをさっきの「私の一生はそうだったんだ」とこのように知った時、安らぎを超えたということでしたか。そういうことをおっしゃっていた言葉からフツと思い出したのです。ですからこれは晩年の御心境ですから「光雲無尋如虚空」、こういう朗々としたというか、金子先生の言葉で言ったら「雲の如く遙かに」あるいは「かすかに」という言葉でおっしゃるでしょうけれども、朗々とした「一如の知見」ですね。そういう世界をお述べになっておるんですけども、そう

いう世界を開いてくる因にね、本来に深い人間苦というものがありまして、それがやはり往生浄土、願生浄土の仏道に先生をグーッとひきよせていた。そんなことも同時に、この「対応」ということを関連して思いおこされてくるんです。

鍵主 今の場合「対応」というのはですね、対決というような意味も含むと考えていいんでしょうか。

広瀬 どうでしょうか、そのへん……。

寺川 ええとですね、対決となるとちょっとその語感の違いはありますが、宗祖の場合でしたら逆謗という問題が出てきますね。つまりね、何か如来と対決しようとするというような姿勢が、求道の道程にあるはずだと。そういうことを、もっと問題をおしつめていけばね、あるいは逆謗というものにふれていくのかもしれないということには感じますけどね。

広瀬 いまおそらく鍵主先生、その「対応」というお言葉を聞いておいでになって「対決」ということを引き出してこられたのは……。

鍵主 それがですね。例えば「如」、その「一如」でもいいですが、もう分らないと。何かこうせまってくるというか、つまり有限である我々にですね、絶えず迷っ

ていき、袋小路に入っては道を見失う私に無導道というふうな、あるいは静かなもう満ち足りた涅槃というかです。ね、そういうふうなものが見失われている。しかし見失われているからそれが欲しいんだし、そしてそちらへ行きたいんですけれども。

ですからそういう意味においては、もう手をさしのべざるを得ないような切実な思いというのか、そういった欲求というふうなものもあるんです。しかし、そうやって手探りしてもなかなかそれがうまくつかめないですね。そのような、何か清沢先生などの自力の無功を信ずるには大変苦勞をした、甚だ骨の折れた……。

寺川 はい、如来を信ずる心が「それが後から後から打ち壊されてしまったことが幾度もありました」とある、そのことですね。

鍵主 はい、何かそこに対決していかざるを得ないようなことがある。いわゆる生半可なことではなしに、つまり「如」というふうに言うこの世界には「雲」というか、そういうものに表現される、ある非常な穏やかさとか暖さとかそういうものがあります。そしてそれはそうあるべきなんですけれども、そういうものが出てくる時、何もなしにそういうことを言うとかえってぬるま

湯のような全くボケてしまったような世界になるのですね。金子先生の言わんとしている「如」とか“likely”とかということは、そういうぬるま湯的なものを言おうとしているんじゃないに、あるやはり御自分の非常に厳しい対決のようなものを通してはじめて生まれてきたんじゃないかなあということを、ちょっとまあ思うんです。

広瀬 いや、それは本当に大きな問題だと思うんですよ。具体的には先程細川先生がおっしゃったり、あるいは大屋先生が御紹介くださったような事実があって、それは欲すると欲せざるとに関わらず自己が、それこそおっしゃる言葉で言えば対決せざるを得ないし、その問題をひっさげて“どうなんだ!”と言わなくてはならない。そういうことがなければ、おそらくこういう問題というんですか、こういうことを最後に先生が言うていかれなかっただろうと私も思います。

お聞きしておりましたね、フツと思いましたが清沢先生がやはり「請ふ勿れ、求むる勿れ、爾、何の不足かある」という、ああいう言葉を使いますですね。あれはあくまでも信仰の内面における言葉であって、世俗のところへ使い下げられていってはならない言葉というんで

すが、もしそれがちょっと堅い表現をとりますならば、宗教を世俗の言葉の中へ持ちかえられたならば、あの言葉は全く死んだものになってしまいうどころでなく、人間それ自体を生ける屍にも変えかねない言葉なんですね。ところが「請ふ勿れ、求むる勿れ、爾、何の不足かある」という言葉が聞きとられてくるところに、清沢先生の場合でありますと、おそらく有限と無限との対応というこの具体性がある。そんなふうには、まあお聞きしながら思いましたんです。その対応という、清沢先生の場合、まあ哲学をおやりになったということもあって、非常にはっきりしているわけなんですけれども。そこでいつも出てくるところと言うんですが、その無限と有限との関係、ちよっとここらへん厄介になりますけれども、金子先生はこういうことを言われております。機法二種深信のところをあげてこられて、そこで対応ということが「一度は逆対応と言われたものであった。されど対応に順逆はない」と、こういう表現をとってこられるんです。これは大屋先生、如何でしょうか。よく、いわゆる「逆説」とか「逆対応」という言い方をします。僕なんか時々使いますけど。

* * *

大屋 ここでは「逆対応」ということもさることながら、言葉ではそれよりもむしろ「感応」ということですね。まあ「逆対応」ということは、これは大体は西田幾多郎先生の一番最後の論文になってます『場所的論理と宗教的世界観』(『西田幾多郎全集』第十一巻)という、普通「宗教論」というふうに言われている、その中に実際に項目もありまして、「逆対応」という言葉が使われているんです。その前に「数学の哲学的基礎附け」(同第十一巻)という、ここでも個と個との逆対応というふうなことで使われています。この「逆対応」というのは結局、プラスとマイナスですね。プラスとマイナスとが逆方向にあるけれども、その逆方向にあるが故にまた対応しているということですよ。

そういう関わり合いの中でプラスはマイナスに、マイナスはプラスに逆転していく。そういうことを西田先生が言われているんです。大体のその内容としては、やはり真宗の悪人正機とか、それから更にキリスト教の場合、神と人間との関係というような、そういう問題も含まれています。しかしこれを見えます時に、丁度西田先生

の『善の研究』というのが出ていますね。『善の研究』が書かれたのが四十一歳の時なんです。その時には、むしろ純粹経験の事実というものが唯一の実在だということとで、純粹経験ということをかんに言われています。その『善の研究』と同時に四十一歳の時に出了ました。西田先生の「愚禿親鸞」(同第一巻)というのがあるんです。それを思いまして見たんですけれども、キリスト教に就てはそこでどういうふうに書かれているかと言いますと、同じ「逆対応」ということであっても、キリスト教はなお「justice」、正義の觀念が強くていくらか罪を責めるという趣きがある。

しかし、真宗はこれと違って絶対他力の宗教であると。如何なる「愚人」如何なる罪人に対しても弥陀はただ汝の為に我は粉骨碎身せりと、これが真宗の本旨であると。だからこの場合にも、やはり先程からずっと話がありましたけど、西田先生は、愚禿の二字を味うということが一切の宗教と言われるものの基本になければならないけれども、しかしその愚禿ということは、真宗において特に着目されたものであると言われているように思われます。

広瀬 で、この「逆対応」ということを金子先生は機

法二種、「法と機との深信は一度は逆対応と言われたものであった。されど対応に順逆はない」とこう区切っているわけです。特にこの一段は読んでも分りますように、曾我先生のいわゆる「感応の世界」ということを先生自身がこう確認しているわけですね。今大屋先生のおっしゃるのを聞きまして、西田先生のおっしゃっている事柄、特に純粹経験というような、そういう表現でおっしゃった『善の研究』の問題がありますが、「逆対応」ということの使い方がですね、そういうふうな信仰の中における出来事として確認されていくのかなあとということをお聞きしておったんですけども……。

大屋 まあ、純粹経験ということは、「善の研究」に於て言われていることですが、これは、未だ「直観」の一つの立場と云うものを表すに対して、「逆対応」と云うことになれば或る意味では、「有限と無限」ということにしても、対応的に弁証法的性格をもって表わされていると言われています。

寺川 そうするとちょっと私はわからんですけれども、例えば絶対に救われないものと、絶対に救おうとするものとの「対応」、「呼応」ということですか、「逆対応」ということは。

大屋 絶対に……。

寺川 絶対に救われない者と、絶対に救おうとするものとのひとつの対応……。

大屋 ええ、それもキリスト教的な意味で「逆対応」ということを取れば、そのようなことになるわけです。然し、私思いますが、浄土教に於ては、この「逆対応」と云うことは、寧ろ「感応」とも、言われていますように、そのような表現では尽きないものがあるように思われます。つまり逆縁、宿業の身に即して、いよいよ弥陀の大慈悲心の中にあるを信知する身とさせて頂く（愚禿）と云うところに、更に、西田先生の云われる「逆対応」と云う表現では、未だ尽くされないものがあるのではないか。金子先生が「感応」、「対応」と抑えられるところには、そのような意味合いがあるのではないでしようか。

広瀬 おそらく、どう言うんですかね、いわゆる機法二種深信という言葉で言われることを論理化する場合、往々にしていうか、屢々その「逆対応」という表現で論理化するわけなんです。それがよく分るように感じられていくわけなんですけど。例えば曾我先生が例の『歎異抄聴記』の中で、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案

ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」という言葉をうけて、唯円が「さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて」とこういうふうに出ている、このところですね。これは機の深信ということで一貫してうけとめていますです。善導の機の深信の金言に少しも違っていない、というふうにうけとめているところで、二種深信のことを曾我先生がお話しになって、その時確かに法から機は開かれるんだ、しかしいったん開かれた機が、開かれてみると機中に法はあるんだ、機の深信でつくるんだ、こう言うていかれます。ということは、先程からお聞きしていることでは、それこそ「愚禿親鸞」これにできるんだと。そこにもう一つ法ということを考えて、あるいは救い主ということを考えるんじゃないに「機中に法あり」と。こういうところに有限と無限、絶対無限と相対有限という言葉で、先生である清沢先生が対応ということを通して明らかにしたことを、曾我先生は「感応道交」ということの内容として領いておられるんじゃないかなあ。それを金子先生も確かめておられるんじゃないかということ、私は読みながら思いましたんです。

寺川 何かおっしゃったことに関連するかどうかわか

りませんが、「愚禿の親鸞」という愚禿の名のりが頭わす、宗祖の宿業の身の自覚がありますね。機の深信の身に即しての表現だと言うていいかと思えますけども、それについて機の深信をですね、まあ『愚禿鈔』の第一深信が「深信自身」と、こういうふうにしき書いてないんで、それを曾我先生が非常に注意しておられて、我が身を信ずる、自身をいただくんだと。それから機の信知、それはまあ信知の自覚内容は「罪惡生死の凡夫」だということがあるにしろですね、そういう機をいただくんだという。あれはやっぱり「逆対応」でなくしてね、おっしゃるように機中法ありか、法中機あり、どちらでしたかね。機中法ありですね。そういうのがやっぱり本来の意味じゃないかなあということをお聞きしながら思うんです。

大屋 ですから、今の機中に法ありというところが、やっぱり「逆対応」という言葉でもちょっと無理なところが出てきているわけなんでしょうね。

広瀬 ですから「逆対応」と一応言える、言えるというか、一応そうだけれども、それはやっぱり対応ということになるとですね、「順逆はない」と、こう言うたところに非常に大きな確認があると私は思うんです。これ

までの宗学の伝統の中でも、機法二種深信というのはどちらが先なんだというような問題がでてきたりしまして、なかなかはっきりしない事柄ですけども、それをまあ曾我先生はああいうふうにはっきりおっしゃって、その関係というのはもしも関係ということで言うならば「感応」だと。こういう言葉で言いきっていかれます。そういう意味では、この確認は短い確認ですが、それこそ真宗の教えが真に仏道だと、仏教だということが弁解無用というかたちでみんなの人々にわかってもらえるかもええないかの、ある意味では岐路にもなるというふうな感じさえ私はするんです。

大屋 この「逆対応」ということだけでは頭わせないということですね。

広瀬 そういうことですね。

大屋 それで「逆対応」ということになる、先程も申しましたようにむしろ神と人間というふうな、そういうものが正面に出てくるような感じがしますからね。ですすからやっぱり、「逆対応」ということでは本当の意味は、むしろ根本的な意味は頭わせないということですね。

* * *

細川 先生の「対応の行信」というところね。短いですがね非常に。エキスですから、有難い文章ですが、この短い一節を読ませていただいて私、明治の宗教的自覚の歴史というものが、そこにね、おのずから成立するようには思えるんですね。

ただ、歴史というと何か前進するようにも考えられるんですが、そうじゃなくて、確かめというものを我々が更に今問題に出ておりましたように、一人一人がどのようには確めて表現していくかということが、まあ後の問題でしょう。そして我々がこれからどうするかということでしょう。すなわちそれは金子先生の場合には、今、機中に法ありとございましたが、それは所謂、浄土教だけじゃなくて、例えば、よく道元禪師のことを先生は引かれて、葉末の先の露、その露の上に真如の月が宿る、そういう道元禪師の詩を紹介されました。ただ浄土教というもののだけでなくて、真宗の宗教というか、そういうところにかえて、やっぱり確認しておられるように思いますですね。ですから、今まあ愚禿という問題が出ましたが、それも宗教の一つの自覚の上で愚禿ということを確めていかなければならないのじゃないんでしょうか。我々は聖道・浄土と二つに分けますというところね、

何かこう愚痴にかえりて往生するとか、愚者になるとかということで、聖道と相対して見ますけれども、先生の場合、常に浄土真宗というものを普遍的な一つの立場で確認しておられる。

広瀬 私は、細川先生の御発言は非常に大きいと思うんですよ。やはり、この一点の確認の伝承と申しますがこの一点の歴史を外したならば、仏道に於ける歴史というものはないんだと思います。それを偶々、明治時代の清沢満之、曾我量深、そして金子大栄という三人の領きの歴史が表現しているんだと。この視点はやがて、それこそ親鸞聖人じゃありませんけれども、後を導く呼びかけだと受け止めてしかるべきだろうと思うんです。ところが、そういうこととして受け止めた時に、金子先生がそれに領いて、お二人の先輩の確認をされている。

とにかく行信ということば、御承知のように、真宗の学問では行信半学という言葉があるように、行信ということがわかればもう真宗学は半分はわかってしまったんだと言われる程、そういうことへの着眼はできたわけなんですわね。ところが、端的に行信とおさえて、それはどう言うことなんだというと、曖昧模糊としてくるという

問題があります。宗教的な自覚の内面に於て語られる事柄でなければならぬですけども、どう表現し、どう確認し、そしてどう伝達するかということになると、寧ろ曖昧であることが一つの特徴じゃないかと思われるんですね。ところが、それを、まあここでは、この二人のところ集約しておっしゃっているんですが、最後に金子先生が受け止めているのが、「本願招喚の勅命」ということです。そこで、敢えて言いますと、「応」の問題と、この問題を明瞭にしようとして、行信の問題をとりあげる。これが第一の確認ではないか。その確信をどう受け止めていくかと。これが問いかけでもあるし領きでもある。

とこのように領解しなくちゃいけないんじゃないかね。それが当り前といえども当り前なんですわね、わかりきっているといえどもわかっていないことのはずなんですけれど、そのことが、一番わからないことといえますか、ある意味では、一番曖昧なまま、分ったような装いの中に伝統されていってしまう事柄、それをいわば最後にチェックしたといえますか、このチェックは、私は今後の真宗学だけでなく、少くとも道を求めるすべての人々にとって大きなチェックになると思うんですわね。

寺川 よろしいでしょうか。ちょっと戻りましてです

ね。「逆対応」ですけれども、考えておりましてそこから素直な個人的な感情、感慨、まあ思いを申しますとね、やはり逆対応というのは、西田先生のお言葉であるとお聞きしますけれども、はなやかな言葉ですね。私は、逆対応の論理というのは、一種のそういうはなやかさをもつことによって、ロゴスの把握ということで、我々が浄土真宗の信仰という自覚の特質をよく理解することができる。こういう恩恵があると思うのです。と同時に、先程から話題になっているように、果してそうだろうかという、疑問もまだ残るのですね。まあ先生が逆対応でなくして、やはり対応だとおっしゃっているけれども、やはり仏道は大道ですからね。

まあ逆対応が小細工だというんじゃないですけれども、そういうのはなやかな論理でなくしてね、大道だと、もう真正面にこうだと、こういうのがね、仏教の殊に寧ろ仏道の智慧といった場合の大切なあり方だと思うんです。

そういうのがあって、如来の知見、一如の知見という言葉が適しいに違いない。で、そういうものとですね、あるがままに見るというので、ある論理をもって見るんじゃないくてね、あるがままに見るという一如の知見を開

くもの、これがまあ、今おっしゃった「対応」・「感応」が「呼応」に、まあ集約されてくる。「呼応」というのは「本願招喚の勅命」というですね、欲生心積、及び名号釈に出てくる宗祖の重要な御領解があると。だから、この一言に名号釈として捉えればですね、呼応というのは「呼」と「応」が一如だという……。そういう領解でしようね。そういうことを、まあ多少、論理という言葉は、論理化といっではないけないと思いますけれども、一如の力、知見は名号に呼びかえされて一如にかえるんだと。こういう働き、つまり願力不思議の信心は大菩提心なりというような、こういうことがあります。大菩提心というのは色んな意味がありましようけれども、やはり無上菩提を証するというような意味があるに違いないですから、「名号不思議の海水は逆謗の死骸もとどまらず」と。ここで、さっきの対決と相互関連してくるんですが、そういう名号に招喚されて、一如にかえるということがでてくる。もう一つは、やはり名号ということがですね、もし招喚、つまり「呼」ですね、如来の招喚、「呼」と我々の「応」、つまり信心と一如だという。願心と信心が一如であるというのが、宗祖の名号の御領解であるとすればですね、私は名号が——まあ六字で表しても十字

で表してもいいと思いますけれども——名号が如来の表現であり、信心の表現である、如来に帰した信心の表現であるということになるかと思えます。その信心の表現としての、まあ念仏、称無尋光如来名、これが大行であり、しかもそれが「大悲の願より出でたり」と言われる。このことの意味深さを「呼応」といい、「感応」といい、「相応」というけれども、あるいは「対応」というけれども、その場を具体的に開くものですね、大悲の願より出でたという、そこにある。つまり、諸仏称名の教えとの出会いですね、そこら辺に我々の一番重要な入口と申しますか、入口であると同時に立つ道があるということをおっしゃるのです。

広瀬 曾我先生は「感応」という言葉をお使いになりますが、感応という言葉は御承知のように禅の方に大きな役割を果している表現なんですけれども、その感応という言葉は二種深信という問題についてお使いになってくると同時に、曾我先生の場合は、もう一つは欲生心成就という非常に重要な、その一点を見失ったならば真宗の信心という問題も明瞭にならないし、従って「本願招喚の勅命」という問題も明らかにならないんだという、欲生心に立つということが決定されていかれますね。

この短い文章の中から拝察をするんですが、あやまちかも知れませんが、金子先生が先輩の言われたことを自分で受け止めた時に、それは実は「呼応」といい、「感応」という、その「応」そのものも賜っているんだという、「応」そのものを賜らなければ「応」ということは成り立たないんだということに気付かれたんだと思いますね。正しく機が成り立つのは、機そのものを賜るから成り立つんだ、それが具体性なんだと。このことを清沢先生は「絶対他力の大道」とか「我が信念」という言葉で、結実させる形でおっしゃった。それを受け止めながらですね、金子先生がそれを有難ういただかれて、そこに本願招喚の勅命、欲生心成就というところに自己の救われてゆく事実というものの確かさというものを受け止めて、その伝統を、それこそ呼応の伝統ですか、応の伝統ですか、先程の細川先生のお言葉で言えば、そういう確認の伝達として我々に投げかけられたのだと、こう受け止めていいんじゃないかなと、しきりに思いましたですね。

聞思の世界

広瀬 今度は、最後になりますけれども、最後に「光

輪の道理」と、光輪という言葉が出てまいりますけれども、御承知でしょうが、光輪という言葉それ自体は、非常に具体的な事柄が縁になって出てきたわけですね。

南部古代型染め師ですが、盛岡の小野三郎さんが、手慰みのようにして描いておりました絵、その仏画が偶々先生のところへ送られてきた時に、それを見ながら先生がおっしゃったことばですね。〃妙だね、この仏さんは、実感はあるけれども実体がない〃こう言われて、それを見て感心しておられましたね。それはうしろにスーッとこう線で描いてある光輪がですね、光背ですね、後光が仏さんにひっ付いていないわけですよ。それを見ながら先生は〃この輪はどんな広がつていくんでしょうね。広がっていく中に限りなく、あらゆるものが包まれていくのでしょうね。こういうのが、やっぱり仏さんというんでしょうね。実体がなくて実感がある、如来というんでしょうね。〃と、尋ねられたことがあるんですよ。恐らく、そのあたりの頃から、特に光輪の道理という問題は、先生がずっと晩年考え続けてこられたことですけれども、それが形になって、言葉になって明確化されてきた縁は明らかに小野三郎さんの仏画だったんですね。

そういうことから、最後に敢えて言えば、救いの成就

と申しましょうか、真宗に於ける救いとはこのような事柄なんだということが、光輪の道理として示されておりますが、その一つに特に先生が注意しておっしゃる、一番最初に出てきますけれども、「死の帰するところをもって、生の依るところとする」という言葉が出てまいりますよ。これをいわゆる、生死の帰依という言葉で言うんですけれども、その時に先生はこれを、逆に言うことは私にはできないと言われるんです。「生の依るところをもって、死の帰するところとする」というふうに言うてもよさそうだけれども、私にはそうは言えなくて、死の帰するところをもって、生の依るところとする」。まあ、ここでも書いてありますけれども「私の生い立ちがあり、人生経験があったといってもよい」と、そうしか言えない。

いかに死すべきか、ということに答えられるものだけが、如何に生くべきかの根底になるという心をですね、繰り返し言われたのですけれども。この点は、いかがでしょう、細川先生。

細川 そう言われたですよ。やっぱり、先生は体が弱かったということでしょうね。だから、何時も死ということを考えておられた。その立場が、ずっと、それが

四十、五十、六十……と、しかももう九十五ですからね。大変な仕事をされ、更に長生きされた。その先生の生涯を、まあ五つ程に分けてみるのですが、晩年、七十一から後、名誉教授になられたのが確か七十か七十一かですね。これを随分長い、まあ晩年と言っているか、宗祖でいえば帰洛後というべきかどうか、その中で私は二つに分けられるんじゃないかと思うのですね。一つはやっぱり『教行信証』中心の頃と、それからまあ、ロゴスからパトスへというようなことで申しますならば和讃ですね、『和讃日々』、あれをずうっと親しんでおられて、そういう原稿を書いておられる中から特に九十を過ぎて宗祖のお歳を越えて、いよいよそういう何ですか、賜りたる生命というものを和讃に託して味わっておられたんじゃないか。そういうことを、この文章をいただきながら特に感じましたのです。

広瀬 成程。先生がお身体が弱かったことを通して領いていく仏教というものが、必然的にこういうふうな私たちをとらざるを得なかった。

もう一つは、ここで先程から一貫してこの座談会の、期せずして主題になってきました「道」ということですが、その道ということが、ここに改めて出てまい

りますですね。道の確認、ということがありまして、その時に曇鸞大師の「知進守退」、その言葉の領解が道という言葉の、道ということの、仏道という、道ということの内容として先生の歴史に確認されてきますですね。このへんいかがでしょうか。

知進守退というと、何かこう進め進めいざ進め、そういう感じなんですけれども、それを先生の場合は、そういう直線であるならば却って道に迷うということになりはしないであろうか、ということをやうて、円環だと、こういうふうには知進守退を領解する。

やはり宗教というものは、何か再生というんですか、死活という言葉があるように、そういう意味では……、大屋先生、いかがでしょうか。

大屋 それは先程言われましたようにですね。やはり守退といいますが、この身をこの身として愚禿と信知せしめられ、摂め取られる大慈悲心を仰いでいくところに、本当に毎日の日暮しを進めていくことが出来るということ。先程の「呼応」といいますが、そのような意味あいがある、やはりこの知進守退という言葉の中に出てくるのであって、そこで始めて、金子先生が言われておられます直線ではなくて、円環であるという、そういうことが云

われているのではないでしょうか。愚禿といふところに退一步を進めていくという……。

広瀬 そうすると、守退という言葉は、普通読みますと、進むことを知って、退くことを守ると、こういうふうな領解で受けとりがちなんですね。ところが先生の場合、守退ということは退一步だと、その退一步の智慧が、日々新たな人生というものを開くんだと、そういうかたちで領解しておられる。だから、直線的な猪突猛進ではないんだという言い方をされるんですけれども。そうすると確かに、守退という言葉で押えたところに生涯愚禿と、こう確認していった事柄がある。そういうことですね。

* * *

細川 あの、私、冒険的なことを申しますのですけれども、まあ、愚禿ということを目覚めしめるものが何かということですがね。何かこう、金子先生が『教行信証』を本当に聞思されて、そして言葉として出てまいりませんが、廻向ということが、往還二廻向という問題があるように思えます。だから、愚禿としての歩みということが、いわゆる愚禿と知らしめる、そういう往還の

二つの姿というものが、特に先生は、晩年にそれを輪として、そういう知らしめる智慧の輪として、先生はいただかれたんじゃないでしょうか。そういうことを、「下」の「光輪の道理」をうかがいながら思ったんです。これは、しかし、広瀬先生の『完全燃焼』（「真宗」十二月号）によく書かれておりますので、一つ先生から少し説明を。

広瀬 今、その輪、ということですが、やはり「光輪の道理」とするところには、一つの道というこの確認があると思いますが、同時に道は直線ではなくて円環だというた時に、その円環という言葉で押えようとしたことは、同時に摂取不捨という問題に移っていくわけですね。だからそれは、決して単に譬喩を他の譬喩へ移行させたということではなくして、道ということが成就していく事実が、具体的には摂取して捨てざる故に阿弥陀と名くるという、阿弥陀との出会いの事実であり、救われていく事実であると。先生の中では、これは決して二つの事柄を一つにくっ付けたのじゃなくて、寧ろ当然の帰結として出てきたと私には感じられるのですが、その時にこれはやはり一つ大きな問題が出ておると思うんです。

それは「光明徧照十方世界、念仏衆生摂取不捨」という、いわゆる『観無量寿經』の真身觀の有名な言葉で

すが、この時の「光明徧照十方世界」というところで切りましてですね、「念仏衆生攝取不捨」と領解するといふことが、今までの多くの領解であつたわけですね。

「光明徧照十方世界」だけれども、攝取不捨されるのは念仏の衆生だと、こういうふうを押えたのですが、ところがここでは、先程細川先生がおっしゃったように、広さが深さを語るんだという言葉で救いの内容を押えておられる。そのあたりいかがでしょう。

寺川 最後の「光輪の道理」のところ、一ヶ所よく分らないところがあるんです。先づ光輪ですね。これは非常に成程なあと教えられたことです。御本尊の御影像を見ると、光はこうパッパッパッと放射状に出ておりますんでね。如来の光というものは、ああいうふうな、パッと出ていくイメージをだいたいもっているんですけれども、そうではなくて「輪」だと、光の輪であつて、ちようど広い池に石を投げるとですね、水の輪——波紋が広がっていくように、光の輪が徧照十方世界と、こういうふうにおっしゃられました。成程なあと、よくまあ領けるのです。ただもう一つ我等の生死の道は輪であり、円であるということは、さっき知守守退という言葉で先生はおっしゃっておられるんですけれども、ちよつとよ

く分らんですね。そのう、例えば彗星、掃星がビューッと飛ぶ、これ直線ですね。地球だったら、太陽のまわりをぐるうっと回りながら、どっかへ回っていくと、こういうイメージかなあと思ってみたりするのです。昇道無窮極という言葉を思い出しましてね。やっぱり、道を昇るには無上涅槃まで窮りない、こういう感じなんでね。どういふふうに領解したらいいだろうか、ちよつと戸惑うところなんです。

ただ、攝取不捨ですね、いま細川先生が光輪の摂化というこゝで言われましたが、光輪の摂化とは、元へ戻して攝取不捨といいますけれども、宗祖の場合は「信心の行者は攝取不捨の故に、正定聚に住す」と、こういうふうにはつきりとおっしゃっております。その正定聚に住すというのが、ここ全体でおっしゃる無尋道で、それが分を尽して用に立つという言葉でおっしゃっているに違いない。そういう点で、やはり宿業の自覚、愚禿ということをおっしゃっております、そういう宿業の自覚を深く踏まえながら、分を尽して用に立つ、つまり生命を捧げていけると。ちようど曾我先生が「信に死し願に生きよ」という、あれを彷彿させるような無尋道の御領解を述べられていると、晩年の宗祖の御心境そのままだ

と、そういうことを強く感銘深く思うんです。

広瀬 その道とおっしゃることが何故、直線ではなく円という言葉に置き換えていかれたのかということとは、恐らく道でありますから、分を、やはり生命ある限りと申しますか、生命を尽して歩くということにおいては、やはり道というものは円だと予測してあることではないと思いますけれども、ただ、その歩くことの中の領きといえますか、そして、その道は単なる直線ではなくして円の、還ってくるという状況。

寺川 ちょうど螺旋のような……。

広瀬 始め、これはねえ、実はこの言葉ではこうなっていますけれども、この話をなさる時に毬をもつてこられるんですね。球、円だけでなくして、円のこう立体化したものの、球をもつてきて話をされたことがあるんです。

寺川 それが、円輪の「幾何学軌跡」ですか。

広瀬 そうそう、そうです。「幾何学軌跡」とは、そうなんです。球というのはどこでも全部円でできているけれども、従ってどこでも中心はあるんだ。どこでも中心があるし、しかもどれも全部円だと。円だけれども、それ自体が完結していつて、どこを捉えても完結し、不

完全というものはない。完結が集合して、完結を益々完結していく。そういうことが実は道ということ、仏道というこの内実ではないかと、こういうことをおっしゃろうとなさったのではないかと思うんです。

寺川 人生の歩みがですね、如何に様々な歩みがあろうと、完結するのでしょうか。

広瀬 そういふことがあると思うのです。それともう一つは、それを円という表現でなさろうとなさった時は、弧ですね。孤独の孤という意味は弧に通じますからね、どんな人間であろうとも、どういう生き方をしようとも、それは、さるべき業縁が決めるけれども、決められたことは決して無意味ということはない、それこそ空過ということはない。

それは、円の中で分を尽してゆくということでしょう。それがもしなかったならば、円は成り立たない。そういう意味で、如何なる存在もそこでは有意味性をもつ。それを与えられるということが、摂取不捨ということの領きだという御領解じゃないかと思うんですね。

大屋 それで、ここに「如来の光輪は即ち衆生の行信として廻向せられる」と、こういうふうに出ていますですね。ですから完結という、やはりそこに絶対に在ら

しめられるという……。

広瀬 そういうことが確かにあるんですね。

寺川 いつでも、どこでも、どのような時にも……。

大屋 絶対にあらしめられる。そういう一つの道にあるということですね。

細川 最後の方は、非常に広いほのぼのとした、ある意味では宗祖の自然法爾の世界というようなものがあるという具合に出てきたと思います。いわゆる、光益といいますが、光明摂化の利益の中で、そしてだんだんお体が弱まってくる、何もできないけれども、そんな中で何かさせていただく、そういう、まあ完全燃焼といわれることですわね。本当に最後までこういうことで、こう働き、一般に用といわれていることでしようけれども、生活していかれた。

寺川 そうですね。

細川 非常に有難い……。

広瀬 最後のお言葉がですね、「平等は即ち如来の実相である」という先生の結びなんです。平等覚というのは、御承知のように如来を表現している言葉ですけれども、それがここでは如来を表現していると同時に、如来に救われていく存在を表現しているというてもいい結び

をしておられるんですね。

そういう意味では平等覚という言葉が、本当にこうダイナミックに生きてくるんですね。それが如の実相だと、従って道ということも、分を尽して用に立つということも、あるいは昇道無窮極ということも、全部実は、この言葉で押えていったということを考えますと、先生のこの短い文章ですけれども、随分透明な宗教的認識とでもいいましょうか、そういうもんだなあとということを、最後のこの一句のところで押え切ったことと思うんです。

*

*

*

広瀬 こういうふうですね、先程からお話がございましたように、一つの伝統というものを明確になさいましたですね。そうすると先生が、まあ敢えて言うならば、清沢、曾我、金子というところで言うならば、金子先生が亡くなって、その教えを遺教として聞くものとして、じやどのように、どんなふうなことで、これを聞いたらいのだろうか。もっともとお話ししていただきたことが多いんですが、時間の制限もありますので短くひとつ先生方におっしゃっていただければと思います。

寺川 ああ、あのう、初めのほうに申しましたようにですね、

金子先生の最晩年の御心境を、絶筆『光輪鈔』に読みます時、宗祖の晩年の御心境を彷彿と感じるわけなんです。それはまあ、何遍も出てきましたように、最初の題が表す「一如の実相」、真如一実功德宝海への帰入、こういうふうな、透明であってしかも仏教の意味での智慧の世界ですね。光に満ちたといいますか、そういう世界に、先生はもう還って行かれたということが、改めて感じられますですね。まあ前後しますけれども、親鸞聖人の還って行かれた世界もこういうものであったかと思われるんです。

そこで我々が、親鸞聖人を学んでいきます時に、やはり因位のいろんな相があるけれども、それこそ平等に還って行く世界として一如の世界、こういうものが告げられてある。その一如の、まあ行信とおっしゃいますけれども、身証、これが一つの課題ではないだろうか、ということですね。僕はやはり、金子先生の因位ですね、いわば、勉強時代といえますか、因位の金子先生のお仕事、あるいは御努力、そういうものに我々は、果位を賛嘆すると同時に、因位を尋ねていくといえますか、そういうことが改めて、金子先生のこういう絶筆によって、それこそ発遣せられておるように思うんです。

広瀬 それは本当に大事なことだと思いますね。徒らに果位だけを賛嘆しているうちに、へたをすると偶像崇拜にもなりかねないという危険さえ感じます。

大屋先生、大谷大学に身を置いておいでになって、まあ学科は違いますけれども、大谷大学の先輩であり、新しい教学の方向を指し示された最後の言葉をお聴きになって、何かアドバイスでも結構です、ひとつお話しただけませんか。

大屋 やはり、これを読ませていただきまして思うことは、金子先生はずうっと若い時から、浄土の問題といますか、そういうことについて、一貫して聞思されてきたことですし、そういう浄土の問題を通して、さっきからしば／＼出てきましたような愚禿の心といえますか、それを本当に知らしめられていく、その中に本当に光りを仰いでいくという、そのような先生のお感じといううようなものが、私にはずうっと迫ってきたものがあるんです。それと、そこにどうしてもつきまとうものは、実体の問題ですわ。さっき靈魂といううなことを言いましたけれども、その靈魂の問題も、これは生活の中には非常に深いものがありますし……。ですから、これもなかなかそう簡単に、知的に割り切るといわけにはい

きません。まあ、そういう問題が私達の中には絶えずからみついてきております。更に、このような私達の領解していくべき問題と共に、先生の若かりし頃に貪欲なまでに、仏道に照して、当時の様々の思潮について深く汲み取り、自らの学、行の道を豊かにされていかれた先生の情熱に、今こそ学ぶべきものがあろうと思います。

細川 私は、金子先生のこの御生涯というものが聞思の御生涯だと、そういうことを『光輪鈔』を通して、まあ特に身に滲みて感ずるわけです。先程、寺川先生が宗祖の一つの生涯に当って色々申されましたが、宗祖の場合、特に法然上人が亡くなられて、やはり遺誠というものがあるんですね……。あれは『西方指南抄』に出されているんですが、あれをですね、四十歳以後の宗祖は五十年間遺教として偏えに聞思していかれた。こういうことを改めて感じます。それで私は、金子先生の遺教をですね、一つの自信教人信というか、これも非常に抽象的になってしまいうんですけれども、特にこの聞思という、このまあ、自分の身に引き当って、そして行くという、そういうことをですね、自分自身の上に更に徹底してまいるかと思っております。これを宗祖の言葉で申しますと、悪人正機の場合ですね、悪人ということを自ら知

るといふ、自識という、更にそれを自覚するということが、それを更にもう一つ深めて自傷していかなくてはならない、自ら傷んでいかなくちゃならないことを教えらる。こういうことはですね、先づ我々は学校で学問しておりますので自識も自覚もしていかにやらんのです。が、更にそれを自傷していくということでありまう。私、先生の聞思の道というものを私なりに、これから少しでも味わって教えをいただいで行きたい。まあ、そんなことを思っております。

大屋 それから、もう一つ宜しいですか。今の聞思ということですが、これもやはりずうっと金子先生の、特に晩年にそういうものをお書きになっていきますように、一貫して聞思ということが出て来ていると思います。その聞という一つの深さといいますが、聞思の道という、聞其名号といえますけれども、あるいは仏願の生起本末を聞いて疑いなく、この身を開かしていく聞という一つの深さというものを、本当に受け止られていたのが親鸞聖人であり、またそういうところは金子先生の御生涯の中に、一貫して出て来ているものではないかと思うのです。

なか／＼、この聞という、聞思の道ということは、浄

土真宗以外に於ては聞とか見とか色んなことが云われま
すけれども、やはり聞思というようなことは浄土真宗に
於てこそ出てきます、浄土教の中の一層根源にある生活
の在り方だと思えます。

広瀬 どうも有難うございました。鍵主先生は途中で、
御用でお退ちになりましたので、先生のお言葉をお聞き
できなかったんですけれども、短い時間で随分中味の凝
集されたものをお話し合いたいだいたわけなんですけれ
ども、色々な問題が展開してきました、我々はこれから
如何にあるべきかということが、否応なしに問われてい
るということをつくづく思うわけであります。ちようど

『大無量寿経』の五十三仏の一番最後が「此の如き等の
諸仏、皆悉く已に過ぎたまへり」という言葉で終ってい
る、あの言葉が、やがて法蔵菩薩を、法蔵比丘を立たし
めていくという、そんなことを念頭に彷彿としましてで
すね、「これをよく読め」と言われたのは、恐らくこれ
を読むことによって、それこそ先程の寺川先生のお言葉
で申しますならば、因位に気付いて、お前自身がその因
位を顕らかにしていけ、ということではなからうかな、
そんなことを思いつつ私は拝読をしたわけであります。
どうも長い間、有難うございました。

(昭和五十二年五月十九日、本学応接室にて。文責編集部)